

第2回 健康と文化の森地区産学公連携協議会 議事要旨

■日 時：令和6年12月4日（水）14：00～15：30

■場 所：藤沢市役所 本庁舎6階 6-1 会議室

■出席者：構成員：5名（オンライン出席含む）

学識経験者有識者：4名

関係事業者：1名

オブザーバー：

藤沢市健康と文化の森地区土地区画整理組合：2名

事務局：

藤沢市 都市整備部 西北部総合整備事務所：5名

藤沢市 企画政策部 企画政策課：2名

藤沢市 経済部 産業労働課：2名

株式会社フジタ

（藤沢市健康と文化の森地区土地区画整理組合業務代行者）：2名

事務局補佐：

コンサル 中央復建コンサルタンツ株式会社：3名

アドバイザー：1名

■議 題：

- （1）産学公連携実行プランの骨子について
- （2）産学公連携のあり方について
- （3）その他

■議事要旨：

(1) 議事「産学公連携実行プランの骨子について」に関する質疑応答

- 全体の完成までのスケジュールを再度示してほしい。
 - 協議会は今年度3回、来年度2回の実施を予定している。開催時期については、今回は3月中旬、来年度は6月、9月の予定である。(事務局)

(2) 議事「産学公連携のあり方について」に関する質疑応答

- 資料中にスタートアップとベンチャーという記載があるが、どのように使い分けられているか。
 - 明確な定義はない。新規事業に取り組む企業をスタートアップ、これから発展する企業をベンチャーとして記載している。(事務局)
- 資料2のp.12 施策に関する意見の中にある「まち中のカフェ」はどこを指しているか。
 - 今回の土地区画整理事業区域を想定しているが、周辺には農家や自然豊かな環境も整っているため、派生的に土地区画整理事業区域外への展開もありえると考えている。(事務局)

(3) 議事「産学公連携のあり方について」に関する意見交換

- 地域に根差した産学公連携を想定されているが、地元の企業は産学公連携やSFCの学生採用の実績がないと思われる。地元企業との産学公連携の事例は思い当たらないため、方策を模索する必要がある。
 - いままで顕在化していなかったコラボレーションを創発できるか。不透明なものをいかに創発させられるかが重要である。
- 一般的な産学公の連携がなぜうまくいっていないのかについて認識を共有したほうがよい。スタンダードなベンチャー企業は、プロダクトアウト型とマーケティング型がある。プロダクトアウト型は、すでに研究・技術があつて、それが市場に当てはまるかどうか重要であり、この場合成功しない理由は市場ニーズにマッチしていないからである。マーケティング型は課題解決型ベンチャーであり、この場合成功しない理由は、実証フィールドがないからである。
- これまでの検討で、過去の事例等でうまくいっていない理由や活動の壁、課題感があれば共有してほしい。
 - コーディネート、マッチングが肝であるが、行政としても取組が足りなかったと認識している。企業側のニーズ、大学側のシーズのマッチングを行う、産学公連携の場づくりが提供できていなかった。まちのハード的な基盤整備に時間を要するため、まずはマッチングやコーディネートに着手したい。
 - また、企業と大学以前に、地域と大学のつながりがなかったことがヒアリング等を実施してわかってきた。SFC開校以来、地域に開かれた大学を目指してきたが、行政としても支援できていなかった。そのため、まず大学・地域で連携し、それに対して企業が魅力を感じてもらえればと考える。

- 現状、研究室独自で活動されている人はいるが、研究室独自かつ単発で終わっている。地域と大学でコミュニケーションが生まれるような機会が産学公連携のあり方の目指す姿としてあってほしい。まずは産学公連携の第1ステップとして、ハード整備ではなく、大学と地域あるいは大学と企業のコミュニケーションが生まれるソフトの仕組みづくりから議論していけたらと考えている。また、そのコミュニケーションの中で、実証実験等を実施したいと考えたときに、まちの中で可変性がある空間があるとよい。加えて、遠藤地区をPRしたいという意見もでてきた。
- 西北部総合整備事務所で実施したインターンシップやSFCの特別研究プロジェクトで学生から提案された内容を共有する。
 - SFCの特別研究プロジェクトは遠藤地区の資源化と課題解決をテーマにした。学生からの提案として、食を通じた地域との交流、研究室のまちなかへの分散化、地域のニーズを学生が社会実装を行うための仕組みづくり、交流の場づくりが挙げられた。
 - 西北部総合整備事務所で実施したインターンシップでは、産学公連携の場づくりとして学生主体のカフェの運営、土地区画整理事業区域内でのサードプレイスの確保、リビングラボが提案された。
- 西北部総合整備事務所で実施したインターンシップやSFCの特別研究プロジェクトで学生からの提案を受けて、事務局として、都市マスタープランで位置づけている企業と大学との連携によるビジネス育成も重要だが、地域や大学・学生による活動拠点の形成にも重きを置いた取組が求められると考えている。
- コーディネート、マッチングを実施する公平で中立な立場の団体が必要である。
- 実証実験の場が必要であるという意見が出た。SFC隣接地の慶應藤沢イノベーションビレッジはベンチャー企業のための施設ではあるが、リビングラボ的な活用もできると考えている。また、土地区画整理事業でのハード整備前に、市民の方に見ていただくショーケースとして、地区の将来像などの発信が可能であると考えている。
- 学生は、いきなり東京の投資家を見つけたり、先輩とのコネクションを探ったりなど、地域でのワンクッションの発想がない。まず、自分たちの足元からビジネスをつくっていけるような場となるとよい。例えば、UCサンディエゴで留学した学生から、起業前に相談できる場所があり、起業のハードルが下がったと聞いている。
- 大企業はマーケットサイズも大きいので、大企業では遠藤地区ではマーケットサイズが合わない。一方、地域の事業者にはサイズが合う可能性がある。地域の事業者の課題感がわかると、まちとして目指すところがわかるのではないかと。
- 現在、大学側から地元へ依頼するルートはあっても、地元側から課題をもって大学へアクセスするルートがない。そのため、地元の協議会やイベントなどに、定期的に大学が参加してくれるとよいという意見があった。意見を伝えられるようなコミュニケーションの仕組みがあればよい。

- 地域と大学が交流できるコミュニティスペースをどうつくるのがよいか。コワーキングスペースでは面白くない。健康と文化の拠点なので、ジムや映画館などまちの特徴とあわせたコミュニティスペースをして、集まっていくのがよいかもしれない。カフェに実利があればよいのかもしれないが、まちの中のカフェを会議室にした事例はあるが、うまくいかなかった。
- 学生がキーワードではあるが、持続可能な取組を目指す必要がある。学生は4年で卒業する。
 - 地域貢献を学生に負わせすぎるのも酷である。学生のやりたいことが地域で実現できるような、お互いにとって良いサイクルができればよい。
 - 意外と人手が掛かるのは実証実験の調整や運営である。そこに学生の協力を得られ、また学生も自分の研究に活かせるとよい。
 - 単なる労働力でなく、例えば自分の将来のキャリアにつながるプロジェクトなどには、学生も関わりたいと思っている。
 - 大学事務局からは、起業ではなく就職する学生もいるため、学生のうちにコミュニティスペースでリーダーシップを積むなど、自分のキャリアにつながるような経験ができる場があるとよいと伺っている。
- コーディネートやマッチングの必要性は分かったが、どのようなコーディネートやマッチングが必要なのか明確にする必要がある。
- 従来型の産学公連携は長年にわたり取り組んでいた中で、成果として課題が見えてきているため、「大学を核としたまちづくり」を基幹に産学公連携を目指すことは良いと考えている。
 - 従来型の産学公連携も、参照すべきポイントがあるため、精査が必要である。特に、地域への協力を地域の事業者を求める場合、地域事業者のメリットも必要である。
 - 従来型の産学公連携のうち、よく実施されてきた市内企業と市内大学を結び付けようとする、無理やりな産学公連携は時代遅れである。一方で、企業が求める実証フィールドを提供するなど、テストベットタウン的な位置づけは重要視したい。また、まちの課題を企業が解決するという形態は、行政が課題を出すと少子高齢化、防災など全国的に変わらない課題になってしまうため、藤沢市特有の課題を解決したほうがよいのではないか。
- 藤沢市特有の課題を解決するのは、汎用性の面でビジネスモデルとしてスケールが小さい。逆に、他の自治体でもある程度共通性があるような程度の課題を解決するのはビジネスにつながる可能性がある。
 - 着手は藤沢市のミクロな課題から、一般化することも考えられる。
- 藤沢市はビジネスコンテストを実施しているが、藤沢市の課題解決があったか。また、受賞した企業の成功事例があれば、そこから学ぶこともあるのではないか。
 - 施策を考える上でも事例を参考にしながら進めていきたい。

以 上